

ただし河越城は太田道灌が築城したのち、大永四年（1524）から数度にわたって北条氏に侵攻され、後北条氏時代の城代、大道寺政繁らによって大幅に拡張された。以来この城は北条氏の重要な拠点となった。さらに徳川時代には、松平信綱の居城「川越城」として生まれ変わったのであるが、この屏風絵の制作は信綱以前のものなので、太田氏の築いた河越城の原型が残されているように思われる。

城の南に位置する「三芳野神社」
大宮の氷川神社を勧請したとも、京都の北野神社を勧請したともいわれているが定かではない。「三芳野」の社名は、在原業平の『伊勢物語』に出てくる「入間の郡三芳野の里」という地名が川越の旧地名であったことに由来するという。

太田道真・道灌父子による河越城の築城によって城内の天神曲輪（本丸の高所）に位置することになったものである。因みに現存する社殿は、寛永元年（1624）川越藩主酒井忠勝が三代將軍徳川家光の命を受けて造営したもので、江戸幕府の直営社となった。

当社は「お城の天神さま」と呼ばれ、童歌「とおりやんせ」はその参道が舞台であるといわれている。城内に入るときは容易だったが、帰りの参詣客は警護の者によって厳しく調べられたことから「行きはよいよい、帰りは怖い・・・」と唄われるようになり、それが城下に流れ、武士や町人たちによって江戸に運ばれ、やがて全国へ広まって行ったものである。

河越城は「初雁城」と呼ばれる
その名前にについては、文学的な伝説が残されている。築城祝いの

宴が開かれた折り、頭上の空を初雁の列が鳴きながら飛んで行き、やがて、あなたの里に落ちていった。太田道灌はその様を見て、「この城をこれから初雁城と呼ぶことにしよう」と侍臣たちに語ったという。また別に、毎年同じ時期に北から初雁が飛来し、城内の三芳野神社の杉（初雁の杉）の真上で三声鳴き三度回って南に飛び去った、という故事がある。



『江戸図屏風』の右雙の一部

河越城は持朝以後、扇谷上杉家の居城となる

太田氏の主君であった上杉持朝は築城後、河越城を自らの居城としたので、同家の家老として築城に当たった道灌には、河越城の支城ともいえる江戸城が与えられた。

河越城は荒川沿岸の低地と接した平地の一点として、僅か数尺の丘陵の上に築かれた城だったが、当時としては大規模な要塞だったので、以後扇谷上杉家の居城として重きをなした。そこで持朝につづいて、政真、定正、朝良、朝興、朝定と、六代およそ八十年間にわたり河越城主として君臨した。

川越街道の成立に向けて・・・
河越城と江戸城との往来のため

に、古道を繋いだ道路は、古河公

方に対する防衛線として機能したのであるが、後に川越が徳川家の支配下になると、將軍家にとつても重要な陸路となり、拡張・整備され、日本橋と川越を結ぶ「川越街道」が成立する。

太田道灌は品川から江戸へ

さきに述べたように道灌は、主君の命令によって、古河公方側の房総の千葉氏を抑えるため、武蔵国豊嶋郡に江戸城を構築したのであるが、『永享記』には、道灌は霊夢のお告げによって江戸の地に城を築いたと記されている。またこの地を領していた「江戸氏」の城館を奪い、利権を獲得するためだったので、との説もあるようだ。

軍記は語る・・・

『永享記』は、室町時代の永享の乱・結城合戦から以後の東国の情勢を描いた軍記で、内容は信頼性が高いとされている。成立の年代、作者ともに不明であるが、諸軍記は全て『鎌倉持氏記』（浅羽民部少輔という人物が宝徳三年（1451）、鎌倉公方足利持氏の最後の日記として書き留めたもの）が源流にあるので、『永享記』の該当部分はこれをリライトしたものと考えられている。

また、『関八州古戦録』（享保十一年1726）に成立した江戸時代の軍記物で、著者は榎島昭武、『関東古戦録』とも呼ばれている。関東における合戦を扱って、各地に埋もれている戦記類をたんねんに集めたもの）には品川沖を航行していた道灌の舟に九城という魚が踊り入り、これを吉兆と喜び江戸に城を築くことを思い立ったという話になっている。ただし、これらの話は、弱体化していた江戸氏を退去させるため

の口実という説もある。

居館を江戸に移す・・・

太田家は、康正元年（1455）品川湊に近く、館を建てて居住していたのであるが、江戸城が完成して品川から居館を遷したのは、長禄元年四月八日（1457年5月1日）であったと言われている。

鎌倉大草紙によれば、江戸城の建設が始まったのは康正二年、その年道灌は、父親から家督を相続した。ただし道灌は嫡子に家督を譲っても隠居はせず、寛正二年（1461）ころまで実権は持ち続けていたという説もある。

なお鎌倉大草紙は、室町時代の鎌倉・古河公方を中心として、康暦二年（天授六年1380）〜文明十一年（1479）の百年の歴史を記した歴史書・軍記物で、『太平記』を継承するという意味から太平後記の別称がある。

江戸城は堅固な城郭だった

翌、長禄元年、まだ二十才だった太田道灌は堅固な城郭を完成した。その当時の海岸線は、平川郷、桜田郷（現日比谷辺り）に迫り、平川は海に流れ込んでいた。海辺だった台地上に立つ三重構造の江戸城の周囲には、切岸（斜面を削って人工的につくった断崖）や水堀を巡らし、城郭は門や橋で結ばれていたという。

道灌と親交のあった禅僧蕭庵（童統の『寄題江戸城静勝軒詩序』や、万里集九の『静勝軒銘詩並序』によると、「星の高き拾余丈、懸崖峭立して周すに繚垣を以てするもの数十里ばかり、外に巨溝、浚塹ありて咸な泉脈に徹り、たたうるに鱗碧を以てす」とある。

城の高さはおおよそ二、三十メートル、けわしい崖の上に立ち、その周りには土堤を廻らし、崖下の深い堀に湧き水が流れ込み、紺青の空や、生い茂る草木の緑を映していたというのである。

外壁に守られた江戸城は、「子城」「中城」「外城」の三郭に区切られ、郭の中の道は階段式に石を積み、本塁に登るようになっていた。

『静勝軒』などを建てる・・・

中城には、道灌が休息するため「静勝軒」と名付けた居宅を設け、その背後には高閣を築いた。その名は彼が用兵のモットーとした「兵は静なるを以て勝つ」（中国の兵書のなかの句）からとつたものである。

また、泊船亭、含雪斎などと呼ばれるいくつもの建物が建てられた。城内には弓場もあり、武士たちが武芸を練っていた。この弓場では毎朝数百人の家来たちが競射をし、もし怠る者があれば罰金として銭三百文をとり、これをたくわえて試射会の際の茶菓の費用にあてたという。また一ヶ月のうち二、三回は「戈を操り、鉦を撃ちて」士卒の教練や閥兵をおこなうなど、軍令はなはだ厳しかったとも記されている。

道灌の兵法は・・・

太田道灌は、諸書を求めて兵法を学び、当時の軍配者（軍師）にとつて必須の教養であった「易学」を修め、また武経七書にも通じていた。『太田家譜』には、管領・細川勝元に兵書を贈ったことが記されている。騎馬武者による一騎討ちを排し、そのころ登場した足輕を活用したので、道灌の兵法は「足輕軍法」とも呼ばれ、新時代の集団戦術とされた。

このような要害の地に抛り、精

兵をたくわえた結果、「江戸城高くして攀すべからず、わが公（道灌）の豪氣東関に申たり」とか、「三州（武蔵、相模、上野をさす）の安危は武の一州に系り、武の安危は公の一城に係る」とかうたわれ、道灌の名は江戸城とともに関八州の国々に知られるようになった。

享徳の乱は関東一円に拡大して
享徳三年（1455）、五代鎌倉公方の足利成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺したことに端を発し、幕府方、山内・扇谷両上杉方、鎌倉公方（のちに古河公方）方の争いが起り、これが遠因となって、関東地方も戦国時代へと向かう。



太田氏の主君、上杉持朝の死

応仁の乱が勃発したのは応仁元年（1467）、内乱は十年を越え、京都は灰燼と化したのであるが、奇しくも関東の一角、河越では、守護大名、扇谷上杉家当主の持朝が死去し、孫の政真が家督を継いだ。持朝の嫡男の頭房は、享徳四年（1455）、分倍河原の戦いで戦死して、すでに亡かったのである。

五十子の戦い
家宰として上杉家に長年仕えた

道真は、若き政真を支えることになり、政真に従って武蔵五十子陣（現本庄市）で古河公方と対陣する。一方、太田道灌は江戸城に在つて武蔵、相模を固めていた。

文明五年（1473）、古河公方の軍勢が五十子陣に攻めかかり、関東管領家であった山内上杉家の家宰長尾景信が死去し、続いて扇谷上杉家の上杉政真が討ち死にしてしまう。若き当主亡きあと、資長ら老臣達の評定によって、政真の叔父に当る定正が家督に迎えられた。

長尾景春の乱が起る・・・
白井、長尾氏は利根川沿いに白井

城（現・渋川市）を構え、景仲・景信の二代にわたつて山内上杉家の家宰と武蔵・上野の守護代をつとめ、所領も多かった。しかも在地の武士を組織して、屈指の勢力を築いていた。景信が死去したあと、子の景春が家督を継いだが、遺憾ながら彼には家宰職が与えられなかった。これを恨んだ景春は、太

田道灌に同心を求めた。道灌の父親である道真の正室は長尾景仲の娘なので、道灌は従兄弟に当る。

しかし拒否されたため文明八年（1476）居城を去り、荒川に臨む断崖に鉢形城を築いて山内家当主、上杉顕定に反旗を翻した。

彼は武勇の士として優れ、古河公方と結んで、五十子陣の顕定軍を急襲した。上杉軍は大敗を喫して、文明九年の正月、五十子を守っていた山内家当主上杉顕定、定正道真は上野国に敗走する。

古河公方に対する防御拠点が落とされたため上杉方は動揺し、相模に小磯城（現・大磯町）を構えていた越後五郎四郎、小沢城（現・神奈川県愛川町）の金子掃部助、溝呂木城（現・厚木市）の溝呂木正重、そして小机城（現・横浜市）の矢野兵庫が長尾景春に呼応した。また多くの地侍も味方した。

しかも石神井城と練馬城（現・練馬区）の城主豊島泰経、また平塚城（現・北区）の主だった弟の豊島泰明も景春を援護して、太田氏の川越・江戸の防御線を断ち切った。

太田道灌は関東一円を制圧

長尾氏に与する各地の城主に對抗して攻めに転じた道灌は、兵を動かして溝呂木城・小机城（現・神奈川県に所在）を速攻、これらを落とし、さらに、川越城の攻撃を図っていた矢野兵庫（小机城へ現・横浜市）を甥の資忠らによって撃退させた。

つづいて道灌は、豊島氏の居城であった平塚城を焼き払い、追撃して来た泰経、泰明を追った。江古田・沼袋の戦いで泰明を打ち取り、石神井城を落城させた。

文明九年四月、長尾景春は五十子を出陣して利根川を渡り、山内

上杉家顕定、扇谷上杉家定正の軍を攻めたが撃退され、道灌は顕定・定正と合流して五十子を奪回、用土原の戦いで景春を撃破した。

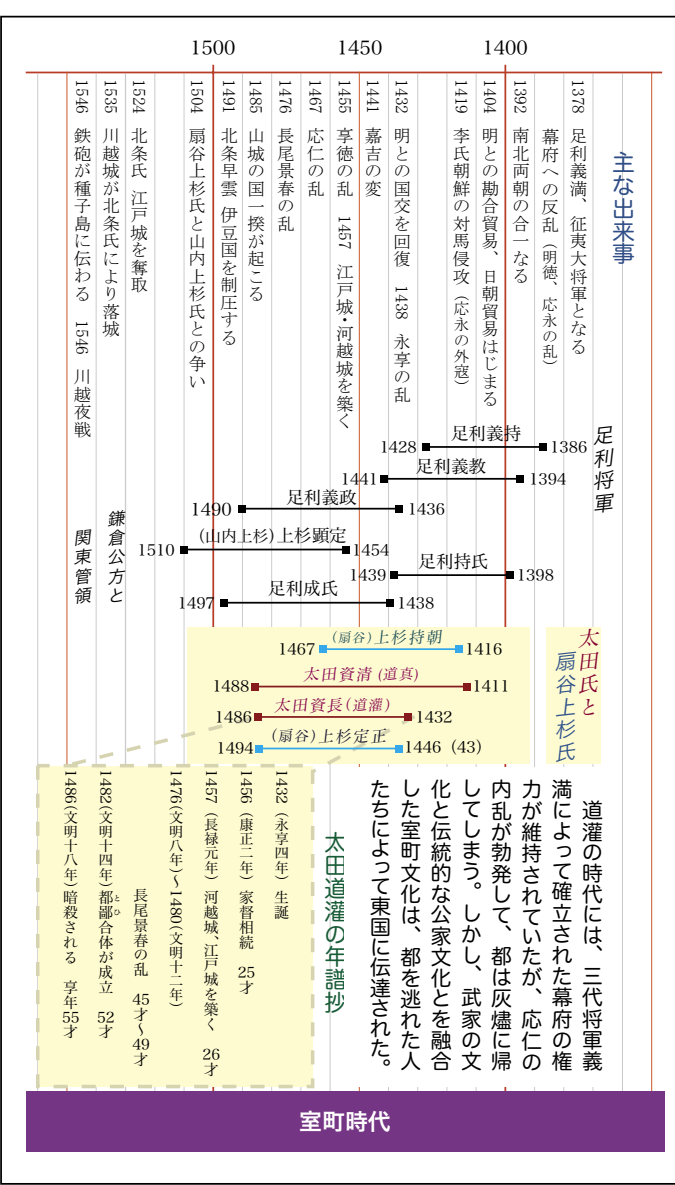
武蔵、相模の諸城を制圧した道灌は、古河公方、足利成氏との和議に反対していた成氏方の有力武将の千葉孝胤を境根原（現・柏市）で破り、ついで甥の資忠らを房総半島に派遣して、千葉氏の臼井城（現・佐倉市）を攻め落した。この戦いで資忠は戦死するが、真里谷

関東全域をほぼ制覇した道灌の活動には、瞠目すべきものがある。

江戸城の守護として・・・

太田道灌は、本丸内の梅林坂上に天満宮を勧請、現・千代田区平河町に所在する平河天満宮は、道灌公が、菅原道真公の霊夢を見て城内に造営したと伝えられる。

また、江戸城の周辺に、日枝神社、築土神社（ともに現千代田区に所在）を勧請した。日枝神社は、川越の



元年（1469）、道真は河越城に当時著名だった宗祇と心敬を招いて連歌会を催した。作品は「河越千句」として世に知られている。

室町時代から戦国時代にかけて、多くの僧侶や文人などが地方に下向した。地方の武将たちの間でも、短歌や連歌が愛好された。太田道真が河越城に招いた心敬は、比叡山で修行し、のち京都清水寺付近の十住心院の住持となって、権大僧都、法印に叙せられた人である。

道灌の時代には、三代將軍義満によって確立された幕府の権力が維持されていたが、応仁の内乱が勃発して、都は灰燼に帰してしまふ。しかし、武家の文化と伝統的な公家文化とを融合した室町文化は、都を逃れた人たちによって東国に伝達された。

太田道灌の年譜抄

冷泉派の歌人として知られる一方、連歌作者として時代を代表する存在だった。また道真が招いた宗祇は、若いころ京都相国寺に入り、宗祇、専順、心敬ほかに連歌を学んだ歌人である。

つぎに掲げるのは「川越千句」の一例であるが、連歌師や道真のほかに武士たちも参加しており、いかに歌道を求める者が多かったかが分かる。

道真・道灌父子は歌人だった・・・

太田道灌が江戸城を居城としたのに対して、道真は扇谷家の本拠となった河越城を守り、主君持朝を補佐したといわれているが、築城後すでに十年余りが経った文明

かすむいづくぞ武蔵野の原 道真

道灌も父の薫陶を受けて・・・

道真の嫡子、道灌も文人として優れ、飛鳥井雅世（蹴鞠・和歌で名高い飛鳥井家の家人）とその子雅親について和歌を学び、その技は後花園天皇に賞賛されるほどであったという。

太田道灌は、父道真の「河越千句」と同じく、文明元年（1469）から同六年のころ、歌人の心敬を品川の館に招いて連歌会を催し、「品川千句」と呼ばれている。

また、文明六年（1474）、江戸城で道灌は歌会を興行した。これが有名な「武州江戸歌会」で、判者は十住心院心敬、講師は平盛連なる面々は道灌をはじめ資忠・資常・資忠の太田一族および増上寺長老音普や木戸孝範らの十七人であった。この木戸孝範は堀越公方政知の一族で、政知とともに関東に下つて道灌の民政顧問をつとめた人と伝えられ、『武州江戸二十四番歌合』が残されている。

法名の道灌を名乗りはじめた正確な時期は不明だが、この年六月の歌合わせの記事が最初のようなだ。

越生と道真・道灌

埼玉県入間郡越生町は、県内のほぼ中央に位置している。越辺川に沿って広がる梅林は、水戸偕楽園、熱海梅園と共に「関東三大梅林」の一つとして知られる。この梅林を通り過ぎ、黒山三滝、顔振峠方面に向かうと、太田氏父子所縁の旧跡が数多く所在している。

人々の霊を弔うために、上杉持朝に命じて創立したといわれている。

遡って、平安時代のころ、山伏や修験道の行者たちは、この地に道場を開いたが、衰微して当時は荒れ果てていた。そこで將軍は、彼が帰依していた児玉党・越生氏出身の無極禪師に請い、その跡地に関東第一の曹洞宗禪寺の道場を開いた。

しかし続く戦乱によって再び荒廃したため、太田道真・道灌は足利義教の意思を継承して、文明四年（1472）、第三世泰叟禪師による修験僧の道場として再建したという。

道灌が生れた三枝庵

越生梅林から越辺川を遡った大字小杉の地に在る「建康寺」は、「自得軒碧跡」といわれる。龍穩寺の東方約六百米の山の中腹に佇む。いま、この寺に立派な伽藍は無く、民家のような風情をもっている。

当時は毛呂氏、越生氏等、地方豪族の残存勢力があつて、若い太田道真に従うことをきらつたので、彼はこの奥深い山中に砦を築いて防衛したものと思われる。東西三百五十間、南北四百間程の三段構えの規模の大きな堅固な砦であつたという。永享二年のこと、道真は二十才だった。永享四年（1432）、この砦の「三枝庵」（山芝庵とも）で道灌が生れたと伝えられている。

太田氏の家系

清和源氏の末流といわれ、源頼政から五代目の資国が、丹波国太田郷に住してからといわれている（武蔵国の大田郷との説もあるが）。資国は同国上杉郷の地頭上杉重房に仕え、上杉が鎌倉に下るに従って太田資国も相模に移住した。のちに関東管領上

杉氏と家宰太田氏は、主従の関係として結び付く。系図によると、資国・資治・資兼・資房・資清と、代々相模に住んだという。

ただし歴史に残る太田氏の活躍は、資清（道真）と道灌父子の時代になってからである。

道灌の生い立ち

才幹を謳われた資清の子として生まれ、幼名は鶴千代。『永享記』などによると、鎌倉五山（建長寺か？）で学問を修め、足利学校で学んだという。

足利学校は、下野国足利庄（現・足利市）に所在した中世の高等教育機関で、室町時代から戦国時代にかけて、関東における事実上の最高学府であつた。教育の中心は儒学だったが、易学においても高名であり、兵学、医学も教えた。戦国時代には、足利学校の出身者が易学等の実践的な学問を身に付け、戦国武将に仕えるということがしばしばあつたという。学費は無料、学生は入学すると同時に僧籍に入つた。学寮はなく、近在の民家に寄宿して学問に励んだ。

幼少の頃から戦乱の巷に・・・

山内上杉家の憲実が、將軍の命で鎌倉公方の足利持氏を討伐した永享十年（1438）、永享の乱のころ七才だった太田道灌は、二十三才になって、享徳三年（1455）勃発した享徳の乱に遭遇、翌年の康正二年（1456）二十五才で家督を相続し、長禄元年（1457）には古河公方への守りを固めるために、父子で河越城、江戸城を築く。ときに道灌は二十六才だった。

次号につづく

西域紀行

その一
深瀬克

1 念願の西域へ

「ついに来たぞ！とうとう来たぞ！」。新疆ウイグル自治区の首府ウルムチ空港に降り立った時、私は心の中でう叫んだ。西域への思いは、60年ほど前に読んだ漫画「孫悟空」で火焰山を見たときに芽生えた。更に1980年4月から放映されたNHK特集「シルクロード」で、喜多郎のシンセサイザーによる「絲綢之路」のメロディーが流れてくると、砂漠の砂が飛んでくるような気分になり、石坂浩二のナレーション『私たち取材班は・・・』の声を聞くと、西域・シルクロードへの思いは募るばかりであった。その後、井上靖の「楼蘭」を



塩分が浮き出た天山山脈

今回のツアー参加者は16人、その内男性が10人もいて、珍しく女性の方が少ないツアーであった。どうも、西域への思いを秘めたオジサンは世の中

中大勢いるようである。

2 大地殻変動を見る

世界最高峰エベレストを含むヒマラヤ山脈は、インド・オーストラリアプレートに乗ったインド亜大陸がユーラシア大陸にぶつかり、両大陸の間にあった海底を押し上げて出来たと広く知られている。しかしこの大地殻変動はこれだけに留まらず、カラコルム山脈やパミール高原はもちろんのこと、ヒマラヤ山脈の北側にあるチベット高原、崑崙山脈、タリム盆地（タクラマカン砂漠）、さらにユーラシア大陸のど真ん中にある天山山脈までも造っていたとは、大きな驚きであった。インド・オーストラリアプレートは7000万年ほど前から1年間に15cmも北上していたそうで、現在でも毎年6・7cm北上し続けているらしい。だから、将来エベレスト山が10000mを超える高さになることもあり得るようである。

新疆ウイグル自治区の旅は、この造山活動を示す地形を確認する旅でもあった。海底に堆積していた地層が高々と押し上げられ、巍々たる岩山を造っていた。天山山脈も海底だったのだ、山肌や平原のあちこちに塩分が白く浮き出ている。この塩分の多い草原で育った羊の肉は大変美味とのことであった。道端のパザールで売っている羊肉には、ハエではなく「ミツバチ」がわんさか集っていたが、ウイグル人たちは、全く気に止めていなかった。



ミツバチがたかる羊肉

3 石窟を訪ねて

今回の旅で、キジル千仏洞・ベゼクリク千仏洞・莫高窟の石窟を見て回った。石窟は全てカメラの持込が禁止されているので、残念ながら石窟内部の写真は一枚も無い。掲載している写真は、現地で購入した絵葉書のコピーである。

キジル千仏洞のあるクチャ周辺は、玄奘三蔵の頃は亀茲国と呼ばれていた。仏典を漢語に翻訳したことで有名な鳩摩羅什（344〜413年）は亀茲国の人（母が亀茲国王の妹で、父はインド人）であったので、キジル千仏洞の前に立派な像があった。そこから、石窟が掘られて

いる断崖の中腹まで、息を切らして登っていった。

現地ガイドは、石窟が壊れた原因には三つあると言った。第一はイスラム勢力によるもので、壁画や仏像の顔を中心に破壊されていた。特に千仏の全ての眼がえぐられていたのは実に痛々しかった。二番目は外国人探検隊によるもので、仏像は持ち去られ壁画は大きく剥ぎ取られてしまっていた。三番目は永年の歳月による崩落で、大きく崩落している石窟の入口部分の多くは修復されていた。それ以外の破壊として、金箔が施されていた部分は全て剥ぎ取られていた。これは現地の人たちがやったことではなからうか。

所々に残っている壁画には、本生譚（釈迦の前世における良い行いの話）が描かれていた。奈良法隆寺の玉虫厨子に「捨身飼虎」の本生譚が描かれているが、キジルにも同様の絵が残っており、シルクロードの終着地は長安ではなく奈良であるとの思いを強くした。

ベゼクリク千仏洞はトルファンにある。ここはインドに行こうとする玄奘三蔵を丁重にもてなした高昌国があったところで、仏教を篤く信奉する国王がいたことで有名である。従って立派な石窟があったはずなのだが、上記の三つの理由により、ここも痛々しい姿であった。残された壁画の中に、五弦の琵琶を演奏する飛天が描かれていた。奈良正倉院に螺鈿による駱駝の図柄のある「五弦の琵琶」がある



五弦の琵琶を弾く飛天

を「ひぐらしの門」と呼ぶように、ここはまるで「ひぐらしの壁画」である。天井西面中央には四つ目・四本腕（四臂）の阿修羅が日月を捧げて立ち、その両脇に風神・雷神がいる。この風神雷神が、国宝に指定されている俵屋宗達（江戸時代）のそれと雰囲気はソックリなのに驚いた。第249窟は西魏時代（6世紀中頃）に描かれたもので、宗達の絵のルーツを見つけたような気がした。

このように見えてくると、仏教のみならず絵画や音楽と言った芸術、さらには、西方

旅の最後に訪れたのが敦煌にある莫高窟であった。ここまではイスラム勢力も入ってくることはできなかったのだ。う、保存状態はずっと良い。現地ガイドの説明では、文化大革命の時、当時の周恩来首相が破壊しないように指示したので、危機を乗り越えることができたのだそう。ここでは合計10窟を見学したが、中でも印象的だったのは第249窟の天井画であった。方形の漏斗を逆さにしたような形の天井で、曼荼羅絵のように人物や動物や山海がびっしり描かれている。その人物も動物も実に生き生きのびのびと描かれており、いくら見ても見飽きることはない。日光東照宮の陽明門



阿修羅・風神・雷神が描かれた第249窟の天井画

の人たちを現す「胡」の字が使われている胡弓、胡坐、胡瓜、胡椒、胡麻、胡桃など、西域を経由して日本に伝わってきたものが多い。ある。人間の営みは古くから国境を越えたスケールで行われて来たことを再認識させられた旅であった。

次号へ続く

（2012/9月8日〜16日）



ヒマラヤ山脈から天山山脈まで、大地殻変動でできた・・・



ベゼクリク千仏洞の前に立つ鳩摩羅什の像